
偽りの主人公（ダークマージ）

白鷺 天羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダークマージ
偽りの主人公

【Nコード】

N8531W

【作者名】

白鷺 天羅

【あらすじ】

強大な力を持つ者は決して幸せになることはない。そんな宿命を背負った闇魔道士の主人公が様々な人と出会い成長していく物語。12歳から始まり20代前半までのストーリーです。今書いているのは骨（大まかなストーリー）です。描写などが少なく読みにくいです。1ページ1000字を目安に書いています。これは書くのが遅いという理由と編集がしやすいという理由です。

主要人物 ネタバレ（前書き）

主要人物に関する設定を公開します。
まだ作中に出てない人物もあります。
ネタバレも載っています。特に主人公
ネタバレが嫌いな方は見ないでください。

載せているのは

主人公

ダッシュ

シルヴァン

フィリップ

ホタル

カルラ

ラルクス

セフィイル

主要人物 ネタバレ

ダークマージ
偽りの主人公

名前 フォールス・フリード

通称 フォル 性別 男 12歳

フィーネル学園中学部生徒 闇の魔道士

一人称 俺

特徴：黒髪短髪

体力はやや高い 知能は高い

真理名：ダークネス果て無き闇

備考：強力な闇だが本がないと使用ができない

本は普段何も書かれていない白紙である

本は四歳のときに拾った

家族とは血は繋がっていない

父リオール 34 大賢者

母ディアナ 33 魔術師

妹エリオラ 12 魔道士

親友ダッシュ 12 魔道士

シルヴァン 12 魔道士

フィリップ 12 魔道士

名前 ダッシュ

通称 ダッシュ 性別 男 12歳

フィーネル学園中学部生徒

火の魔道士 成長率A

一人称 俺

特徴 赤髪 長身 ツリ目

体力かなり高い 知能低い

真理名：奮迅の炎

備考：農民生まれの魔道士

家族思い

家族 父・母・姉・弟

親友 シルヴァン

フィリップ

フォールス

名前 シルヴァン・ダビット

通称 シヴァ 性別 男 12歳

フィーネル学園中学部生徒

水の魔道士 成長率B

一人称 僕

特徴 青髪 整った顔

体力やや高い 知能やや高い

真理名：鎮静の水

備考：貴族の子

家族 父・母・兄

親友 ダッシュ

フィリップ

フォールス

名前 フィリップ・グレミヨン

通称 フィリップ 性別 男 12歳

フィーネル学園中学部生徒

地の魔道士 成長率A

一人称 僕

特徴 口数が少ない

体力普通 知能高い

真理名：堅牢な地

備考：名門貴族の子

魔法の实力は高い

フィーネル学園に来た理由は兄と比べられないため

家族 父・母・兄

親友 フォールス

シルヴァン

ダッシュ

名前 ホタル

通称 ホタル 性別 女 12歳

フィーネル学園中学部生徒

樹の魔道士 成長率C

一人称 私

特徴 黒髪 ショート

体力低い 知能やや高い

真理名：可憐な花

備考：病弱な兄を持つ

名前の由来は弱くても人を幸せにさせる

そんな存在になってほしいため

家族 母・兄・兄

親友 カルラ

名前 カルラ

通称 カルラ 性別 女 12歳

フィーネル学園中学部生徒

雷の魔道士 成長率 B

一人称 私

特徴 黄色の髪

体力やや高い 知能普通

真理名：

備考：活発な少女

シルヴァンに好意を抱いている
家族 父・母・弟
親友 ホタル

名前 ラルクス・フリード
通称 ラルクス 性別 男 26歳
フィーネル学園中学部教師
雷の魔道士

一人称 俺
特徴 紫色の長髪
体力かなり高い 知能高い

真理名：紫耀の雷
備考：リオルの弟子
親友 セフィイル

名前 セフィイル・シード
通称 セフィ 性別 男 26歳
フィーネル学園中学部教師
樹の魔道士

一人称 私
特徴 生徒思い 優しい顔
体力普通 知能かなり高い
真理名：慈愛の樹
備考：シード族の血を引いている
親友 ラルクス

用語（前書き）

用語のチョットした説明
随時更新します。

まだ出てきてない用語もありますが気にしないでいいです。

用語

魔法使い

魔法を行使する者の総称として呼ばれる。

魔道士 魔道師 魔導師 魔導師

魔術師 賢者 大賢者 魔女などの称号がある。

魔道士

魔道の修行をする者。多くの魔法使いの称号。

魔道師

一流の魔道士として認められた者に贈られる称号。

魔導士

独学で魔法を学ぶ者の称号。師がいないために魔法の实力は低い。

魔導師

魔法を発展させる活躍をしたものに贈られる称号。昔の偉人を指すことが多い。

魔術師

魔術に特化した魔道師に贈られる称号。

賢者

魔道師の中でも特に実力がある者に贈られる称号。

大賢者

最高位の魔法使いの称号。今は13人の大賢者が存在する。

魔女

本来、魔力を持たない人が、何らかの方法で魔力を得た者。魔女と書いてあるが男の魔女も存在する。

魔気

全てのものが持っていると言われる、目に見えない力。特に生命に強く関係しているとされている。

魔法使いは魔気をコントロールすることが最低条件。

魔力

魔気を変換させ魔法の性質を作り出す力

大きく分けると六質系（火質系魔力、水質系魔力、風質系魔力、雷質系魔力、樹質系魔力、地質系魔力）、特異系（特質系魔力、異質系魔力）がある。

火質系魔力

対立は水

主に高熱に特化した魔力

水質系魔力

対立は火

主に低温に特化した魔力

風質系魔力

対立は雷

主に流れに特化した魔力

雷質系魔力

対立は風

主に導きに特化した魔力

樹質系魔力

対立は地

主に成長に特化した魔力

地質系魔力

対立は樹

主に形成に特化した魔力

特質系魔力

その他の魔力。融質魔力と眷質魔力ある。

融質魔力ゆうしつ

六質系魔力の中の二種類以上が混ざり一つの魔力になったもの。

例 刃一（地＋風）

眷質魔力

魔女が使う魔力。

異質魔力

この世にたった一つしかない（他に類を見ない）魔力の総称。

例 闇質魔力

魔道

魔技術（最近では魔技だけ）と魔法を総称して呼ぶ。基本的には魔法と同じ意味で使うが、魔道と言うと魔技術も強調される。

魔法

魔気を魔力で現象化（誰しものがそれを認知できる）させたもの。火や水などを作り出せるが、本物ではない。殆どが空想から作る。魔法は一次現象と呼ばれ、その影響で起こる現象を二次現象と呼ぶ。例を挙げると魔法で火を作るとそれが一次現象、その火で水を温めると温めたことが二次現象となる。魔法は使用者の魔力が途絶えると、消えるが魔法の影響で起きたことは消えない。例で言うと火はすぐに消えるが水の温度は急激に下がらない。

魔技術

魔技と魔術の二つからなる。魔気をコントロールすること。

魔技

自身の中に眠る魔気をコントロールする、一般的な魔技術。

魔術

他人の魔気や自然の魔気をコントロールする。魔技術の難しい方。熟練者でも使用するのには難しい。魔技ができる者ならば誰でも才能はあるのだが、実用的なものにするのは簡単ではない。魔術に特化した魔道師は魔術師と呼ばれる。

モノローグ

強大な力を持つ者は決して幸せになることはない。

自ら命を絶つ者

自分に嘘をつき続ける者

人と関わることをやめた者

他人に束縛される者

親しき者の犠牲

信じた者からの裏切り

そして、愛すべき者の死

望まぬ結果を生むことしかできない存在である。

そしてまたその悲しき宿命を背負った一人の少年がいた。

彼の名はフォールス

闇の魔法が使えるただ一人の魔道士である。

「今年から俺も、フィーネル学園中学部の生徒になるのか」

3年前にフィーネル学園小学部に入學してから今日まで長かった。でもこれでやっと本格的な魔法を学べる。俺は闇魔道士だから基本くらいしか教えてくれないだろうけど。

「ひまだな」

フィーネル学園は全寮制なのだが、いまは後期の授業が終わり、2か月ほどの長い休みがあるためほとんどの人は家に帰っている。そのため、本来四人部屋であるところに俺一人しかないのである。中学部の前期が始まるまであと十日。あと数日もすればみんな帰ってくるだろう。

「しかし、ひまだな」

図書館に行こうと思ったがやめた。図書館は学校が休みでも開いており。本を借りることもできる。寮に残る俺にとっては希重な道楽である。しかし図書館は寮から離れており行くのが面倒だ。

俺は荷物入れから一冊の本を取り出した。学園に入るときに持ってきた物の一つである。

ただそれは本と言っても何かが書いてあるわけでない、ただ白紙のページが何百ページと続いている。

この本は子供のときに拾い、それを親父に話したところ、親父は大事に持っておけと言われた。

それ以来その本を大事にしてきた。というわけではない。入学するときに必要なものを持つていくのに荷物袋を使ったが、入れた覚えもないのに入っていたため、そのときは親父が入れたと思っていたがどうも違うらしい。

この本はなくても次の日には部屋の机の上に置いてあり、またどんなことをしても汚れることない。

学園の先生に聞いたところ何らかの魔法ではないかと言われたため、魔法の効果で汚れないのならいいだろうと雑に扱っている。

「そろそろ昼飯だろうか」

本を直して寮の食堂に向かう。食堂は一階にあるため階段お降り

てゆく。

食堂に着いたときにはいい匂いがしていた。俺はすでに決められていた席に座り周りを見渡す。普段なら二百人以上いるのだが、みんな帰省してて、いるのはに二十人程度だ。

食事を終えて部屋に帰る前に図書館によることにした。

二つの本を借りて部屋に帰りそのまま数時間読みふけていて、いつの間にか夕方になっていた。

夕飯の時間だと思い食堂に向う。

部屋に戻ってくるとベットに横になる。

「今日は、もうねるか」

と私はあくびをしながら言った。

「早く帰ってこいよ、ダッシュ、シルヴァン、フィリップ」

ダッシュ

前期が始まるまであと五日

多くの生徒が学園に戻ってきている。しかしまだ俺のルームメイトは、誰一人帰ってこない。

隣では久しぶりの再会で喜んでる声が聞こえる。

「誰が一番最初に帰って来るだろうか」

ダッシュか、シルヴァンか、フィリップか、誰でもいい、早く帰ってこい。

などと思っているうちに、いきなり部屋のドアが開いた。目線のやると彼が立っている。

「久しぶり、元気か」

と俺に声をかけてきた。

燃えるような赤い髪、獲物に狙いを定めているような鋭い目。

彼の名は

「ダッシュ」

一番最初に帰ってきたのは彼だった。

懐かしい顔に少し落ち着いた。

ダッシュは自分のベットに歩いてゆき、荷物を置いてベットに腰を掛ける。

「まあ、今年からもよろしく」

「ああ、こちらこそよろしく」

「じゃあ俺、寮長に帰ってきたこと報告してくるから」と言いダッシュは部屋を出た。

数分後、彼が戻ってきた。

「もうそろそろ、昼飯だから行こうぜ」

そんな時間か。

「よし行くか」

俺は立ち上がり食堂に向かった。

食堂に行くと多くの人が席に着いて食事をしている。

食堂の席順は部屋順である。つまりダッシュは俺の隣に座ることになる。

周りを見渡すともう百人近くの人たちがいる。半分近くの人たちがこの寮に帰ってきたことになる。

明日、明後日ではほぼ全員帰ってくることになるだろう。そう思いながら食べているとダッシュが、しゃべりかけてきた。

「一人じゃ、退屈だっただろう」

「ああ、とてつもなく退屈だったよ」

「どうして家に帰らないんだ」

俺は食事を止めた。

「俺の家は遠くにあって帰るのに少なくとも、十五日はかかる。休みの半分以上旅をすることになるなんて、俺は嫌だね」

「そうか、俺は五日もあれば大丈夫なもんだが、十五日はさすがにキツイな」

食事が終わってもずっと話していた。久しぶりに積もる話があったからだ。

夕食を終えて部屋に戻った俺たちは、もう寝ることにした。

明日が楽しみだ。

シルヴァン

「おはよう」

「おはよー」

彼がやつと目を覚ました。昨日はよほど疲れていたのだろう。

「ダッシュもう昼だぜ」

「本当かよ、うわ、本当だな」

俺たちには、窓から差し込む太陽の光でだいたいの時間が分かる。ダッシュはベットから起き上がり、大きなあくびをした。

「少し早いかもしれないが、昼飯、食いに行こうぜ」

「ああ行こう」

返事をし、俺はドア開けようとした瞬間、いきなりドアが開いた。予想外の出来事に少し驚いてしまった。

ドアを開けたのは、彼は俺たちのルームメイトだった。

うすい青色の髪と整った顔が特徴のシルヴァン。女子にとっても人がある。

「シヴァ、久しぶり」

「ああ、待たせたな」

「別に、お前の帰りを待ってなんかいねんだよ」

後ろからシヴァを挑発するダッシュの声がする。

「これは、これはダッシュさんではないですか。早いお帰りですね。しかし、ダッシュと二人つきりとは、辛かったですよ」

そっぴいながら俺を見る。

「お前と一緒にのほろがよつぽどつれーよ」

ダッシュはシヴァにガンをつける。

「僕は、今、君と遊んでる場合ではない。相手なら後でしてやる」

シヴァは自分のベットに荷物を置く。

「じゃあ僕、寮長のところに行ってくるから」

そして部屋を出て行った。

「あつ」

俺は部屋を出て、階段を下りていくシヴァに言った。

「俺たちは昼飯食いに行くから」

シヴァの右手が上がった。

おそろく分かったという合図であろう。

俺はダッシュと二人で食堂に向かう。

食堂には大勢の人がいる。まだ寮に帰ってないのは五十人にも満たないだろう。

その中の一人にフィリップも含まれていのだが。

席に着き俺たちは、目の前にある料理を食べ始める。

しばらくするとシヴァが来た。報告は終わったのだろう。

シヴァの席はダッシュの前である。

「お前の顔見ると飯がまずくなるんだよ」

「だったら、目隠しして食べるんだな」

彼らの会話は、正直面白く聞いててあきない。

食事お終えた俺たちは、部屋に戻る。

部屋でのんびりと過ごしていると、恒例のダッシュとシヴァのケンカが始まる。

ケンカをしているところを見ると、何も知らない人は二人は仲が悪いと思うだろう。しかし彼らは仲は、悪くはない。むしろいいほうだろう。

その理由は簡単だ。なぜなら彼らは、三年間ともに同じ部屋の仲間だからだ。

「もうそろそろ寝るかい」

夕飯を食べ終えた二人に俺は聞いた。

「そうだな」

「少し早いかもしれんがそれがいい」

部屋に戻りベットに入った。

「おやすみ」

「おやすみー」

「いい夢を」

フィリップ

昼を過ぎても、フィリップはまだ帰ってこない。あと三日で学校が始まるというのに、何をやっているのだろうか、帰ってくる途中で倒れたのでないか。こんなところにある学校だ、ありえなくもない。

近くの町まで15キロほどある。朝その町から出たとすれば、昼前には着くはず。心配になってきたな。もしかしたら明日に帰ってくるかもしれないが少し見てくるか。

「シヴァ、ダツシュ、俺、外でフィリップの帰りを待つから」

「ああ、分かった」

「心配性だな、お前も」

ダツシュが笑いながら言う。確かにそのとおりだと思う。

俺は部屋を出て階段を降り、寮の玄関から出た。目の前には広場があり、その奥には女子寮が見える。

俺は学園の正門がよく見えるベンチに座った。

「人が多いな」

全校生徒千人以上いるこの学園では、休みとなると多くの人たちが広場に集まる。友達と遊んだり、話したりしている。おそらく付き合っているであろう男女のカップルも見かける。

「フォオルじゃん、久しぶりだね。」

聞き覚えのある女子の声した。

「カルラさん、帰ってたんですね」

彼女は俺らと同年で、数少ない女友達である。

「うん、昨日ね、ところで何してんの」

「フィリップが帰ってくるのをここで待っているのです」

「フィリップくん、まだ帰ってきてないの」

カルラは心配そうに聞いてくる。

「ええ何事もなければいいのですが」

何事もなければ……か、いったい何を考えているのだ俺は。あいつはちゃんと帰ってくる。そう思わなければいけないのに。

「ねえ、あれ、フィリップくんじゃないかな」

彼女が指を指す、その方向には門を通る人がいる。間違なくフィリップ本人である。

彼の姿を見て安心した。すぐに彼のもとに走り声をかけた。

「フィリップ遅かったな、何かあったのか」

「……いえ、ただ少し忘れ物をして……」

「町まで取りに戻って遅くなったのか」

「……はい」

「まあ、無事ならいい。寮にいくかい」

「……はい」

彼は少し笑顔で返事をした。

フィリップは、口数が少なく、表情を表にあまりださないため、初めて会ったときは何を考えているかたまに分からないときがあった。今でも分からないときもあるが、こいつがいいやつなのは誰よりも俺が知っている。そう自信を持って言える一番の親友だ。

「ぶじでよかったね、フォル。そして久しぶり、フィリップくん」

いつの間にか、カルラが横にいた。

「それじゃ、わたし、帰るから」

そういつて、女子寮に帰っていく。

「俺たちも行こう」

自分達のたちの寮に帰る。部屋に戻るとシルヴァン、ダッシュがフィリップに話しかけた。やはり彼らも心配だったのかもしれない。

夕食を食べ終えた俺たちは、三日後から始まる授業の話をした。みんな魔道の実技の授業が気になるようだ。そういう俺も気になる。ダッシュは火、シルヴァンは水、フィリップは地、そして俺は闇。

闇の魔法を教えられる先生はどこにもいない。俺はどういう扱いになるのか、それはその時になってみないと分からない。

????? (前書き)

用語が少し出てきます。

?????

気が付くと俺はここにいた。重く、暗い世界。辺りを見渡しても、何一つない。自分が立っているのか、寝ているのかそれすらわからない。

ここは夢だろうか。そうでなければこの状況を理解できない。

「ここは、夢の中ですよ」

突然声が聞こえた。声ができる方向に振り向くとそこに人がいた。

俺はそいつのことを人としか表現できなかった。男なのか女なのか、老いているのか若いのか、見ただけでは漠然とした存在としか認知できない。聞こえてくる声も曖昧としたもので確実な判断をすることはできない。

「お前は誰だ」

俺はそいつに向かって叫んだ。

「それは、私の名前を聞いているのですか。それとも、私の存在を聞いているのですか。」

「両方だ」

「名前は今は言えませんが、『18番』とだけ名乗っておきます。

そして私は、あなたと同じ異質系魔道士なのです」

「俺が異質系であることをなぜ知っている」

「知っていますよあなたが、閻魔道士であることも」

「なぜそれを知っている。俺が閻魔道士であることは、ごく限られた人たちが知らないはずだ」

「ごく限られた人しか知らない。確かにそうかも知れませんが、少なくとも私たちの中では有名ですよ」

「私たちの中だと、他にも知っている奴がいるのか」

「ええ、あなたが思っているよりもいますよ」

どうゆうことだ、閻魔道士であることを知っているのは、家族とフイーネル学園の数人の先生か知らないはず。それ以外の人は特異

系魔道士としてか知らない。そう親友にも、闇魔道士であることは、伝えてない。少し聞いてみるか。

「どうやって闇魔道士であることをしった」

「ではなぜ、あなたは、自分が闇魔道士であること知っているのです」

「なぜって、それは……それは……」

答えることができない。なぜなら俺は初めから知っていたような気がする。誰かに教えられた訳でもなく、生まれたその時から。

「わからない」

そう答えることしかできなかった。

「あなたは、初めから知っている。自分のすべてを。ただそれを思い出すことができないだけ」

「そうなのかもな」

「大丈夫です。私たちはあなたの味方です」

「味方」

どういうことだろうか。

「そろそろ時間です。またお会いしましょう。悲しき宿命を持つ者よ」

「さて、まだ話が……」

さっきまで暗かった世界が突然はじけて輝く世界となり、そのまま俺は意識を失った。

ここは、ベットの上か。どうやら寮の部屋のようにだな。外を見ると朝日が昇っている。

さっきのは、何だったんだろう。

その答えを知るのはまた後の話

初日（前書き）

主要人物に
セフィール
ラルクス
追加

初日

ついにこの日が来た。そう学校が始まるのだ。

「お前から起きろ、今日から学校だぜ」

ダツシュが叫んでいる。みんなすでに起きているというのに。

「お前が一番起きるの遅いんだよ」

シヴァがダツシュの頭を軽く叩く。ダツシュは笑っている。

「準備が終わったらいくぞ、みんな」

俺たちは寮から出て学校へと向かった。学校は小学部と中学部で校舎が分かれており、中学部の校舎は初めて入ることになる。

「俺たちの教室は二階の三番目だな」

クラスは五つに分かれており、俺たちはその三番目である。クラスを決めるのは寮の部屋順であるため、俺たち四人は同じクラスということになる。

教室へはいるともう十数名の人たちが席に座っていた。そして見覚えのある人もいる。

「こつちに座りなよー」

俺たちに向かって手を振るカルラ、そしてその隣にはホタルちゃんが生きている。彼女達も俺たちと同じクラスか。俺は一応みんなに聞いたが、別に座る場所のはどこでもいいらしいので、彼女達の前座ることにした。

俺たちは少しの間、話し込んだ、もっとも、会話に参加をしていたのは俺とダツシュとシヴァとカルラだけでフィリップとホタルちゃんとは話を聞いているだけだ。

「みなさん、おはようございます」

話に夢中になりすぎて先生が来たことに気が付かなかった。俺たちは先生に注目した。男の人だが見た感じ優しそうな先生だ。

「今日から君たちの担任になるセフィール・シードと言います。これから三年間よろしく願います。まず最初に出席を取りたいと思います。名前を呼んだら返事をしてください。」

先生が一人ひとり名前を呼び始めた。このクラスには四二名の生徒がいる。長くなりそうだ。

「全員いますね。ではこれからの時間について説明します、みなさんご存知だと思いますが、中学部では魔道の実技が始まります。火の魔道士、水の魔道士、風の魔道士、雷の魔道士、樹の魔道士、地の魔道士

それぞれに分かれて実技の授業を受けることになります。自分がどれに当てはまるかわからない人は手を挙げてください」

手を挙げた。なぜならどれでもないからだ。特異魔道士はどうなるのか知らない。

「あなたはいいです。ほかにいませんか」

予想外の答えに驚いた。

「では実技の授業を受ける場所を教えます。一人ひとりちゃんと覚えてくださいね。まず火の魔道士、場所は——みなさんちゃんとわかりましたか。ではいま言った場所に行ってください。そこに先生がいますのであとはその先生に従ってください」

「先生、俺はどうなるんですか」

恐る恐る聞いてみた。

「あなたは、ここで待っててください。あなたの担当が来るはずですよ。では、私も行ってきます」

「分かりました」

みんなはそれぞれの場所にいく、俺はここで待つ。どんな先生なんだろうか不安で仕方ない。

師

突然、教室のドアが開いた。

「フォールス・フリードは居るか」

「俺ですけど」

俺の名前を呼んだその人は二十代と思われる若い先生だった。整った顔つきなのだがそれ以上に髪に目が行った。恐ろしく長い髪は背中を覆うマントのように見える。正直、邪魔にしか見えない。

「お前が、あの人の……」

俺を見ながら呟くように言った。あの人とはいったい誰を指しているのか、おそらくは俺の知っている人物だと思うのだが。

「あの人って誰ですか」

「いや、なんでもない」

そう言い、俺の前に座る。隠すことなのだろうか。まあいい、聞きたいことは色々ある。まずはこの人が誰であるのかだ。

「ところで先生は誰ですか」

「ああ自己紹介、まだだったな。俺の名はラルクスだ。今日から三年間、お前の魔道の実技を教えることになった。」

「俺の魔道は知っているんですよね」

「どんな魔道でも、基本はどれも同じだ。闇魔道であろうと例外ではないはず。そして、言っておくが俺は雷魔道ウイザード師だ。12歳から魔道師、直々に指導してもらえるんだ。ありがたく思え」

魔道師って、たしか一流と認められた魔道士に与えられる称号ではないか。この学園の先生でも数人しかいないと聞いた。この人そんなに凄いのか。

「とりあえず今日は魔道に関する知識の確認だ。実技に関しては次回からやる」

「あ、はい」

「まずは魔道の問題だ。魔道には二つのものからなっている。何と

何だ」

「魔技と魔法です」

「そうだ。では、魔技や魔法を使用するために必要なものは」

「魔気です」

「魔法を引き起こすために必要なものは」

「魔力です」

「そう、魔技を使用するには魔気が必要になり、魔法を引き起こすには魔気と魔力が必要になるわけだ。じゃあ、魔力にはどれだけの種類が有るでしょう」

「大きく分けるなら、火質系魔力、水質系魔力、風質系魔力、雷質系魔力、樹質系魔力、地質系魔力、特質系魔力、異質系魔力などに分かれます。細かく分けるなら膨大な数になります」

「それだけ知っていれば十分だ。そして魔力は生まれた時から決まっている。俺は雷質系だ。だが持っている魔力が一つとは限らない、火質系、水質系、の二種類の魔力を持っている者もいる。現に俺だって水質系も持っている。だが、雷質系に比べたらほんの小さな魔力だ。だから二種類の魔力を持っているときはどちらか優れた方で魔法を使うことになる」

「よし、知識はこんなもんでいいだろう。じゃあ俺は戻るから、次回から楽しみにしとけよ」

先生は立ち上がりドアのほうに向かう。

「先生、最後に聞いていいですか」

立ち止まり、こちらに振り向く。

「なんで、髪伸ばしているんですか」

気になっていた、疑問を問いかけるが、先生はただ笑って教室を出て行った。

今日の授業が終わり、俺たち六人は今日の魔道の授業の感想を言い合った。みんな次回を楽しみにしている。

魔技『集』

二回目の実技の授業が始まった。

ラルクス先生に連れられて外に来ている。どうやらここで実技の練習をするらしい。

「よし、始めるか」

振り向き俺の顔を見る。

「今から教えるのは魔道の基本中の基本。魔技の『集』だ」

「『集』ですか」

「そうだ、これが出来ないと魔法なんて使えない」

『集』魔道の基本であり、最も重要な動作だ。これの出来で、魔道士としての実力が分かるらしい。

「まずは、俺がやって見せる」

手を前に出し、構えている。が『集』をしているのかは、まったく分からない。

先生が聞いてきた。俺は正直に答えた。

「分かるか」

「まったく、分かりません」

「そりゃそうだろう、何もにもしないんだから」

何を言っているのだ。さっきやって見せると言ったではないか。

ジョークのつもりだろうが、こっちは真剣に見ていたのだ。それをこの先生は。

それを察してか、先生は言った

「悪かった。謝ろう。だがお前が正直な奴で良かったよ。正直な奴は、強くなるからな。もしお前が見栄を張って、分かったと答えたら、どうしようかと思った」

軽く笑いながら、真面目に言われると、どうしていいのか分からなくなる。

「今度は本当にやる。見ていろ」

先ほどと同じように、手を前に出し構える。

「魔気を手に集中させる」

先ほどとは感じが違う。手の先に何かがある。なんにも見えないのに、そこには確実的に何かが存在している。

「これが魔気なのか」

「そうだこれが魔気だ。そして、これが魔法だ」

いきなり先生の手に紫色の閃光が宿り、音を立っている。数秒ほどで消えた。

これが雷の魔法。初めて見た魔法に俺は感動していた。これほど凄いのか。いつか俺もこんな魔法を使うことになるのか。

「今度は、お前がやってみろ」

「わかりました」

手を前に出し、集中してみるが、何もできない。何度も何度もやってみるが、感覚すらつかめない。やり方を間違っているのか。そもそもやり方が今一つ分からない。

「イメージしろ。手の先に全てをもってくるように」

全てをもってくるようにイメージする。……なるほど、さっきまで俺は手にだけ集中させていたが、まずは全身を意識し、それを一点に絞る。それが『集』か。よしやってみるか。

自分でも手の先に力が集中しているのが分かる。すごい、どんどん魔気が大きくなっていく。

「そこまでだ」

先生の怒鳴る声が聞こえた。俺は驚き、集中を解いてしまった。

「やりすぎだ」

「やりすぎですか」

いったい何がやりすぎだというのか。

「今日の実技は終わりだ」

何か怒らせるようなことをしただろうか。仕方ない、寮に帰るか。

「どうしました。ラルクス」

「セフィイルか、あいつ恐ろしいな。今日初めて『集』を教えたんだが、その出来が、とても今日初めてやったとは思えない。『集』に関しては恐らく本気の俺と互角の出来だ」

「貴方と互角ですか、あの歳で」

「ああ、恐ろしいな才能ってやつは」

魔技 『圧』

三回目の実技の授業が始まった。

俺は先生に言われた木の前で待っている。これからここで授業をするらしい。周りには何も無い。俺たちの校舎が遠くに見える。なぜこんなところでやるのか。確かほかの連中は、教室で実技を習っているはずなのに。まあ俺が考えても答えは出るわけがない。きつと先生の何かしらの考えがあるわけだ。

「待たせたな」

先生がやつと来た。遅れて来たが全く気にしていないようだ。

「今日はなんでここでやるんですか。みんな教室でやっているのに」
思っていること先生に聞いてみる。

「本来、外で授業を受けるのは、二年からだ、俺が教えているのはお前だけだ。だから、お前の今のレベルに合わせて、授業の内容を変更することが出来るが、ほかの先生は違う。何十人も教えているんだ、授業の内容を個人のレベルで変更することはできない。つまりだ、外でやるのはお前が外でやるのが相応しいと思ったからだ」
俺に合わせて授業を進めるといふことか。納得。

「それで今日は何をやるんですか」

「魔技の『圧』だ。分かるか」

「それくらいわかります」

『圧』魔気を圧縮させることだ。そうすることにより魔気の密度を高め、質の高い魔法を使用することができるのである。『集』に続く重要な動作だ。

「今回は『集圧』をやる。『集』と『圧』を同時にやることだが、今は『集』で魔気を集め、その次に『圧』で魔気を圧縮させる。まず俺が手本を見せてやる」

そう言っ先生は俺に対して横に向き、手を出し構えた。本来先生ほどの魔道師なら、構える必要はないのだが、見ても分かり易い

ように構えてくれている。

手の先に魔気が集まってゆく、そして次の瞬間、魔気の大きさは小さくなったが、高密度の魔気に変化した。『集』のときとは違い、圧倒的な存在感を出している。恐怖を抱くほどだ。

先生は『集圧』を解いて俺に言った。

「次はお前がやってみろ」

先生と同じく構えた。まず『集』で魔力を集める。さっきの先生と同じくらいの量だ。

「よし次は、『圧』だ」

先生が声をかける。それに反応し俺は魔力を圧縮する。どうにか圧縮出来ているが、先生に比べるとまだまだだ。いや、本来は先生と比べるべきではないかもしれない。

俺は『圧』を解き、先生の顔を見た。自分ではどれ位の實力か分からないからだ。

「安心しろ初めてでそこまで出来たら、むしろ優秀なくらいだ」
その言葉に俺は安心した。

「よし、後の時間はその練習だ」

残りの数十分は『圧』の練習で終わった。

「今日はもう終わりだ」

「ありがとうございました」

俺は先生にお礼を言い寮に帰って行った。

魔技『弾』（前書き）

最低でも一週間に一回は投稿します。

魔技『弾』

5回目の実技の授業が始まった。

俺はいつものとおり木の前で待つ。しばらくすると先生がやってきた。先生は俺の真正面に立ち、今日の授業の説明をする。

「今日は魔技『弾』を教える」

俺はそれを聞いて、驚きが隠せなかった。『弾』を習うのは、まだ先のことだと思っていたからだ。

「早くないですか」

「『集』も『圧』も、教えることはない。後は一人で鍛錬すればいい」

一人でやれって、たかが数回授業を受けただけだ。しかし、ほかのやつより先にやるということは、決して悪いことではない。

「分かりました」

「じゃあ、まずは『弾』の説明だ。大体は知っていると思うが、『弾』というのは魔気を弾くことだ。主に攻撃型の魔技だが、これ単体では威力は弱い。だから『弾』を使うときは『集』や『圧』を組み合わせる。もつとも、『弾』に限らず他の魔技でも『集』や『圧』使うがな」

『集』や『圧』は魔技の基本動作で、これから習うのは攻撃動作、そしてもつと後のほうで教えてもらうことになるであろう防御動作、魔技はこの三つの動作にわけることができる。『弾』は攻撃動作の一つで単純であり、数々の応用が利く。使い方を見ただけでその人がどのような戦い方をするのがわかるらしい。

「フォールス、木から少し離れろ」

先生は『弾』を実際に見せてくれるらしいが、木から離れるということは、この木を使うということだろうか。

「どれくらい離れればいいんですか」

「木全体が見えるくらいだ」

そう言い先生は木から10メートルほど離れた。俺も先生と木がよく見える位置に移動した。

「始めるぞ」

俺に伝わるよう大声で言い、手を前に出し『集圧』をしている。

「木の葉をよく見ている」

木の枝葉に注目した次の瞬間、枝葉の一部分がなびいた。風ではない。風ならばもっと全体的にゆれるはずだ。これが……『弾』。

「出来るか」

いつの間にか先生は隣にいた。出来るかと聞かれても、やってみなくてはどうとも言えない。

「最初からうまくやろうなんて思わなくていい。やるだけやってみる」

そういわれて、さっき先生が立っていた場所に向かう。思ったよりも木が遠くに見えた。先生がやったとおり我真似をする。『集圧』を三秒ほどして、木にめがけて魔気を弾くが、思うようにはいかなかった。まず『弾』の速さだ。弾いた魔気は先生のと比べると格段に遅い。そして問題は『集圧』の持続だ。手から離れた時点で弱まっていた。あれじゃ木に届く前に消えてしまう。

「色々と問題点が見つかったが、時間はたくさんある」

そうだな、まだ時間はたくさんある。練習すればきっとできる。

今はそう思うこと大事なんだろう。

残りの時間は『弾』の練習をした。少しは上達したのかもしれないがまだまだだ。先生が言うには、よくできてるほうだと言われたが、そんなことはどうでもいい。重要なのは、自分が納得できるかということだから。

授業は終わり、俺は寮へ帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8531w/>

偽りの主人公（ダークマージ）

2011年10月12日06時02分発行